

讃岐における古墳から寺院への変遷過程

林 正憲

I 古墳から寺院へ

近年、7世紀における古墳の消長と寺院の成立について、各地域において研究の進展が見られるようになった。関東地方では三舟隆之による一連の研究（三舟2003など）のほか、古墳から寺院への変遷を題材としたシンポジウムにおいて地域ごとの状況が明らかにされてきた（小林・佐々木編2013）。東海地方でも、伊勢・志摩から伊豆までの東海全域の状況を整理した鈴木一有の研究（鈴木2013）や、美濃地域に着目した拙論（林2021）がある。そして西日本では、古くに横穴式石室と寺院の分析を行った山崎信二の研究（山崎1987）や近畿地方を中心に論じた白石太一郎の論考（白石2006）のほか、山城と河内の小地域を題材とした拙論（林2010）、播磨国揖保郡を対象として詳細に論じた岸本道昭の研究（岸本2013）、西日本全域の終末期古墳を総括的に論じながら古代寺院の成立についても触れた広瀬和雄の研究（広瀬2013）などがある。

これらの研究を総括すると、①古墳の消滅と古代寺院の成立について、連続性が認められない地域が普遍的に確認できること、②その背景として、各地域の政治的背景だけではなく、古代の交通路や地方行政区分の成立が深く関係していること、の2点に集約できる。そこで本稿は讃岐地域を検討の対象とし、改めて以上の2点を検証することにしたい。

II 古代の讃岐地域—概略—

地理的特性 讃岐地域は瀬戸内海に向けて南北に流れる各河川の周辺に平地が存在し、河川間が山塊で隔てられていることが多いため、必然的に南北に長い小平野が林立する状況となる。したがって、古代の郡領域は南北に長く展開するという特徴がある。そして、各小平野を東西に横断するかたちで南海道が延伸している。

『倭名類聚抄』によると讃岐国には11の郡が存在しており、東から順に、大内郡・寒川郡・三木郡・山田郡・香川郡・阿野郡・鵜足郡・那珂郡・多度郡・三野郡・刈田郡となる（図1）。

このうち、刈田郡以外の10郡については奈良時代までの文献や木簡に郡名の記載が認められることや、古墳及び古墳群もその範囲ごとにまとまって存在していることから、本論

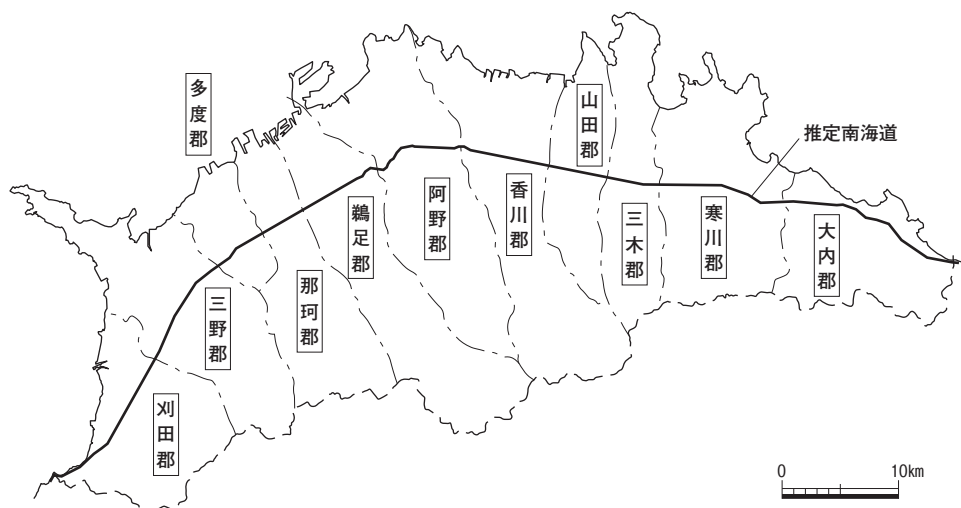


図1 讃岐国の郡について

が対象とする6世紀後半から7世紀においても、概ねこのような地域区分がなされていたと考えて差し支えなかろう。

古墳時代後期後半～終末期の讃岐地域 本稿で対象とする古墳は古墳時代後期後半から終末期にかけてのものであるが、当該期の古墳の状況については、既に概説や研究会等で論じられている（渡部1990、大久保1995、佐藤1997、信里・乗松2004、下原2006など）。それらを整理すると、①6世紀後半に入ると前方後円墳が消滅する一方で、「広域首長墳」（信里・乗松2004：p.132）とでも呼ぶべき全長約10m超の大型横穴式石室をもつ古墳が築造され、讃岐西部に築造される大野原古墳群はその代表格といえる、②それらの古墳は、一部を除くと4～5世紀の古墳及び古墳群とは直接的な系譜関係が認められない、③各古墳の大型横穴式石室には構造的な共通性が認められるが、群集墳の横穴式石室との共通性はなく、むしろ群集墳ごとの地域性が認められる、④7世紀中頃からは単層化・薄葬化が進行し、首長墳の築造も終焉を迎える、という状況が窺える。

古代寺院の立地状況 讃岐地域における古代寺院については、発掘調査が実施されておらず、採集瓦によってのみ、その存在が推定されているものもある。紙幅の関係上、本稿ではその存在の是非については議論せず、諸先学の研究（藤井1983、亀田1995、川畑1996など）をもとに、7世紀の建立と考えられる29寺院を検討の対象とする。

これら29寺院について、郡ごとの分布を見てみると、大内郡と鵜足郡では1寺院しか建立されていないが、それ以外の郡には2～4寺院が点在しており、明らかに「1郡1寺」という状況ではない。そのため、全国的にも有数の寺院集中地域と言えよう。

次に各寺院の立地状況に注目すると、2つの特徴を指摘することができる。まず1点目は、既に先学によって指摘されていることだが、南海道を志向した立地する寺院と、そう

でない寺院の2者が存在する点である。さらに、後者は丘陵近くに位置する寺院と、平地に位置する寺院の2者に細分できる。この3者の立地と、6世紀後半から7世紀に築造された古墳及び古墳群の立地を比較することが、本論の主な目的である。

2点目は、これらの寺院の距離がおおよそ4里(=2.134km)を隔てて分布している点である。もちろんそうではない寺院もあるが、概ねその傾向が認められるため、やはり4里という数字には何らかの意味があると考えられる。そこで、半径4里に囲われる面積を算出すると14.3km²となり、岸本道昭が播磨国揖保郡で算出した1つの「里」あたりの平均領域面積(=14.44km²)にほぼ等しいことがわかる(岸本2013)。したがって、この半径4里で囲われる領域は「里(郷)」の範囲を示している可能性がある¹。そこで本稿でも、各挿図に寺院から半径4里の円を描いて表現し、それに基づいて分析を行う。

古代寺院と瓦 讃岐地域では古瓦の出土地が多数存在していることから、瓦の分析に基づいた寺院研究が盛んに行われている。例えば、古代寺院の分布や創立氏族との関係、軒瓦文様の分布と伝播についてまとめた藤井直正の研究が最も基礎的な研究であろう(藤井1983)。また亀田修一は、広く瀬戸内海沿岸地域の状況を概観しつつ、その中で讃岐地域の特質を明らかにした(亀田1995)。そして本稿に大きく関わりを持つのが梶原義実の研究である。梶原は寺院がどのような観点から選地されているかに焦点を当て、「地勢的纏まりをもつ区分ごとに、寺院選地の傾向が異なり、また瓦の分布もある程度それに対応している」と述べた(梶原2016:p.98)。梶原は選地の要素として古墳も取り上げているが、議論としては深く掘り下げられていない。そこで、本稿では梶原の研究を継承しつつ、古墳との関係をも視野に入れて論じることとする。

瓦そのものの研究については、川畑聰と蓮本和弘の一連の研究がある。川畑は『讃岐の古瓦』展の開催に際して、讃岐出土古瓦を集成するとともに、各資料の文様系譜を明らかにして年代観を示した(川畑1996)。その後、それらの同範・同文関係から、有力氏族の政治的動向を復元している(川畑2003)。蓮本は古瓦の製作技法を詳細に検討し、その技術系譜と歴史的背景に言及した(蓮本1999・2001など)。さらに近年では、範型と枷型に着目した山田誠司の研究(山田2008)や、瓦生産と寺院造営事業の特質を論じた森郁夫の論考(森2010)や、瓦当文様系譜を畿内主流派や朝鮮系といった新たな観点から整理した岡本治代の研究がある(岡本2020)。本稿でもこれらの研究の成果について、適宜引用しながら議論を展開することにした。

Ⅲ 各郡の状況

大内郡 大内郡における古代寺院は、白鳥廃寺のみである(図2)。白鳥廃寺は白鳥郷²

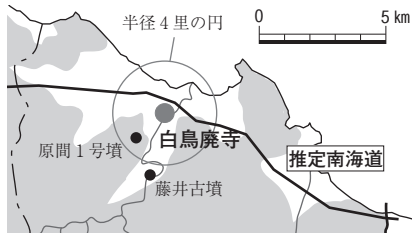


図2 大内郡の状況

に所在し、南海道のすぐ南に位置している。寺域は南北50m、東西60mで、東に塔、西に金堂、北に講堂と推定される建物跡が確認されている。出土瓦の中に法隆寺式軒丸瓦³と重弧文軒平瓦が確認されることから、創建時期は7世紀末と推定される。

その白鳥廃寺の南西約1.6kmの位置に存在するのが原間1号墳である。径12m前後の円墳で、全長約6.5mの右片袖式横穴式石室をもち、6世紀後半～7世紀初頭の築造と考えられている。さらに白鳥廃寺の南方約2.3kmの位置には、墳形・規模は不明だが全長約7.9mの無袖式横穴式石室をもつ藤井古墳が造営されている。こちらも6世紀末から7世紀初頭の古墳であろう。なお、この2基の古墳は白鳥廃寺と同じく白鳥郷の範囲内と考えられる。

寒川郡 寒川郡には下り松廃寺、石井廃寺、極楽寺跡、願興寺の4寺院が建立されている(図3)。最も西側に位置する下り松廃寺は難波郷に属し、南海道のすぐ北側の平野部に立地している。伽藍の詳細については不明であるが、素弁六弁蓮華文軒丸瓦が採集されており、近年の研究では7世紀末～8世紀のものと考えられている(岡本2020)。

その北東約2kmに位置するのが石井廃寺である。神埼郷に属し、丘陵上に立地する。塔心礎が残されているが、未調査のため詳細は不明である。重圈文縁複弁八弁蓮華文軒丸瓦と重弧文軒丸瓦が創建瓦と推定されることから、7世紀末の創建と考えられる。なお、長楽寺(三木郡)と同範の藤原宮「垂式」軒平瓦(川畑1996:p.98)が出土している。

一方、下り松廃寺の南西約1.4kmには極楽寺跡がある。石田郷に属し、寺院の南側に広がる台地の北端に位置し、南海道にも近接している。発掘調査によって塔と講堂が南北に並ぶ伽藍配置が確認されており、創建期の瓦として鋸歯文縁細弁十二弁蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦が確認されている。これらは川原寺式軒丸瓦の系譜に連なるものと考えられることから(川畑1996など)、7世紀末の創建と推定される。なお、軒丸瓦については上高岡廃寺(三木郡)・弘安寺跡(那珂郡)・郡里廃寺(徳島県)から同范品が出土している。

そしてこれら3寺院よりやや北西に距離をおいて、願興寺跡が建立されている。造田郷に属し、北西に広がる丘陵端部に立地しており、南海道からはやや離れる。発掘調査等が行われていないため、伽藍の詳細は不明であるが、川原寺式軒丸瓦と重弧文軒平瓦が確認されていることから、創建時期は7世紀末と考えられる。

次に古墳の状況に目を向けると、下り松廃寺の東約2kmの位置に八剣古墳がある。墳丘が失われ、横穴式石室も玄室部分を残すのみとなっているが、玄室長は4.5mで、6世紀後半の築造と推定される。下り松廃寺とやや離れているが、同じ難波郷に属している。

図3 寒川郡・三木郡・山田郡の状況

なお、願興寺の属する造田郷ではなく、石井廃寺と同じ石田郷に属するようである。

このほか、棕の木古墳（円墳？両袖式横穴式石室、7世紀か）や大石北谷古墳（円墳？両袖式横穴式石室、7世紀か）が存在するが、いずれも近接する寺院は確認されていない。

以上を整理すると、古墳と近接せずに南海道を志向する下り松廃寺⁴、南海道から離れて古墳と近接した丘陵地に位置する石井廃寺、南海道とも古墳とも近接する極楽寺跡、その両者から距離を置く願興寺というそれぞれの在り方が見て取れる。

三木郡 三木郡の古代寺院の特徴としては、いずれも南海道から遠く離れた丘陵端部に立地していることである（図3）。まず、南海道の北側の丘陵端部には始覚寺跡が造営されている。井上郷に属し、発掘調査によって一辺約110m（＝1町）の寺域が復元され、現在の始覚寺境内に塔心礎が残されているほか、回廊が確認されている。細弁十二弁蓮華文軒丸瓦と藤原宮式軒平瓦が出土していることから、7世紀末～8世紀初頭の創建と考えられる。なお、軒丸瓦の2種は宝寿寺跡（山田郡）のものと同範である。

次に、南海道の南側には上高岡廃寺と長楽寺が所在している。前者は高岡郷に、後者は水上郷に属しており、両者ともに伽藍の詳細は不明である。上高岡廃寺からは極楽寺跡などと同範の細弁十二弁蓮華文軒丸瓦や重弧文軒平瓦が確認されていることから、7世紀末の創建と想定される。一方、長楽寺からは藤原宮式軒丸瓦とともに藤原宮式軒平瓦（石井廃寺出土瓦と同範）が出土しており、8世紀初頭頃の創建であろう。

古墳の状況も南海道の南北で大きく様相が異なる。まず北部を見てみると、始覚寺跡から約1.5～2kmの範囲に古墳及び古墳群が散在している。塚谷古墳は直径約14mの円墳で、復元長5.2mの横穴式石室が確認された。石室内からは飛鳥Ⅳ期と思しき畿内系土師器が出土していることから、7世紀末の築造と考えられ、始覚寺跡とほぼ同時期の古墳といえる。陰浦1・2号墳は直径6m程度の小型の円墳で、1号墳が無袖式、2号墳が両袖式の横穴式石室で玄室幅0.8m以下の狭小なものである。ともに7世紀中頃の築造と考えられる。天神山古墳群は3基の円墳からなる古墳群で、いずれも直径8～12mの円墳からなる。そのうち2基では右片袖式横穴式石室が確認され、6世紀後半頃の築造と推定される。風呂谷古墳は直径約11mの円墳で、玄室長約3.3mの横穴式石室をもち、7世紀中葉の築造と想定される。潮満塚古墳は直径15mの円墳と推定され、石室の大部分が埋まってしまっているが、玄室長4.5mであり、6世紀末の築造と考えられている。

このうち塚谷古墳と陰浦古墳群、天神山古墳群は始覚寺と同じく井上郷に属するが、風呂谷古墳と潮満塚古墳は池辺郷に属している。

一方、南海道の南側では顕著な古墳群が少ない。わずかな事例として、上高岡廃寺の西約1kmの位置に所在する西土居古墳群が挙げられる。この古墳群は5基の円墳からなり、いずれも復元径8～10mの小古墳である。6世紀後半から築造が開始されるが、埋葬施設

は箱式石棺であり、6世紀末から7世紀初頭の6号墳において、ようやく小型の横穴式石室が採用されるに至る。このことから、讃岐地域でも横穴式石室の導入が最も遅い古墳群といえよう。なお、西土居古墳群は上高岡廃寺とは異なり井閑郷に属している。

このように、三木郡の古代寺院はいずれも南海道を志向せず、古墳が近接する丘陵端部に立地する始覚寺及び上高岡廃寺と、古墳が近接しない長楽寺廃寺の2者がある。

山田郡 山田郡には山下廃寺、宝寿寺跡、高野廃寺、下司廃寺の4寺院が確認されている。このうち、南海道に面しているのは高野廃寺のみであり、あとの3寺院はいずれも丘陵端部に立地する（図3）。

山下廃寺は高松郷に属し、発掘調査は行われていないが、軒丸瓦6型式と軒平瓦2型式が採集されている。白鳳～奈良時代初頭に属するものとして、細弁蓮華文軒丸瓦と藤原宮亜式軒平瓦がある⁵。

宝寿寺跡は山下廃寺の南東約2.5km、先述の始覚寺の北西約2kmに位置する。宮処郷に属し、土壇と礎石からなる塔の存在が推定されている。出土瓦のうち、素弁六弁及び七弁蓮華文軒丸瓦、細弁蓮華文軒丸瓦（うち1種は始覚寺跡出土瓦と同範）や重弧文軒平瓦は7世紀末～8世紀初頭のものと推定される⁶。

高野廃寺は坂本郷ないし三谷郷に属し⁷、三谷郷には南海道三谿駅の存在が推定されている。発掘調査が行われておらず、伽藍の詳細は不明だが、細弁蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦、藤原宮式軒平瓦の存在から、7世紀末～8世紀初頭の創建であろう。

下司廃寺は殖田郷に属し、礎石と土壇からなる塔跡が確認される。出土瓦としては川原寺式軒丸瓦と重弧文軒平瓦が確認されており、7世紀末の創建と推定される。

次に古墳の状況を見ていくと、山下廃寺周辺に古墳が集中していることが見て取れる。山下廃寺の北100mには墳形・規模は不明ながら、全長9mの両袖式横穴式石室をもつ山下古墳が存在する。そして山下古墳の北西500mの位置には、大型横穴式石室があったと伝えられる小山古墳が存在した（現在は消失）。さらに山下古墳の南西600mの位置には直径20m以上の大型円墳と推定される久本古墳がある。全長約10.8mの両袖式横穴式石室で、銅碗類一括などの出土遺物も多数確認されており、それらの年代から、6世紀末から7世紀中葉まで埋葬が行われていたようである。上記の山下古墳・久本古墳も同様の年代観であろう。一方、山下古墳の南東600mには漆谷古墳群が存在する。直径8m程の円墳3基からなり、いずれも無袖式横穴式石室をもち、7世紀代の築造と推定される。このほか、久本古墳の南西700mの茶臼山丘陵斜面にも7世紀頃と推定される全長3mほどの小型横穴式石室が2基確認されている（久米池南遺跡）。なお、以上の古墳はすべて山下廃寺と同じく高松郷に属している。

このほか、山下廃寺と宝寿寺跡の中間地点に滝本神社古墳がある。直径15m前後の円墳

で、羨道から左右に玄室が展開する「T」字形の横穴式石室をもつ。左玄室は規模不明だが、右玄室は長さ4m、幅1m前後であり、羨道長は4mである。県内唯一の珍しい形態で、時期は6世紀末から7世紀初頭であろう。宝寿寺跡と同じく宮処郷に属する。

南海道の南側では、高野廃寺の南西約500mの位置に平石上古墳群が築造されている。計6基からなる古墳群で、直径13～14m程の円墳からなる。2基の右片袖式横穴式石室が確認され、6世紀末の築造と推定される。その南西約500mの位置には矢野面古墳があり、直径約20mほどの円墳と推定される。全長約10mの両袖式横穴式石室をもち、6世紀末～7世紀初頭頃の築造と考えられる。一方、下司廃寺の周辺では少なくとも6世紀後半以降の築造といえる顕著な古墳は認められない⁸。

香川郡 香川郡は3寺院が確認されるが、先述の4郡とは異なり、いずれの寺院もそれぞれ8里（＝約4km）以上離れて分布するという特徴が認められる（図4）。

北から見ていくと、瀬戸内海沿いに勝賀廃寺が存在する。笠居郷に属し、現在までに寺院に関連する遺構は検出されていないが、多くの瓦が採集されている。その中で最も古相のものが川原寺式軒丸瓦と重弧文軒平瓦で、次いで藤原宮式軒丸瓦・軒平瓦となる。

次に、石清尾山丘陵の南端に位置する浄願寺山東麓にあるのが坂田廃寺である。坂田郷に属し、金銅製釈迦誕生仏立像が出土したことで知られている。発掘調査が実施されたものの、未報告のため概要は不明である。川原寺式軒丸瓦と重弧文軒平瓦のほか、奈良～室町時代の各時期の軒瓦が出土しており、中世後半まで存続していたようである。

南海道のすぐ南側には百相廃寺が位置している。百相郷に属しており、伽藍の詳細は不明だが、現在の船山神社境内から瓦が出土している。その中に藤原宮式軒平瓦が含まれていることから、8世紀前半の創建と考えられる。

古墳の状況に目を向けると、顕著なのが坂田廃寺の背後にある浄願寺山古墳群と南山浦古墳群である。浄願寺山古墳群は浄願寺山山頂に形成された50基からなる群集墳で、6世紀後半から7世紀前葉にかけて形成されている。その浄願寺山東麓に位置する南山浦古墳も13基からなる群集墳で、6世紀末から7世紀前葉の築造とされている。坂田廃寺は南山浦古墳の南400mの位置に所在することから、これら古墳群との関わりは極めて密接であったことが窺える。また、浄願寺山の北に位置する石清尾山にも石清尾山古墳群と北山浦古墳群があり、そこにも両袖式を中心とした横穴式石室が多数存在している。地形や距離を考慮に入れると、これらの古墳群との関係も想定できよう。

そして注目すべきは坂田廃寺と勝賀廃寺の中間に位置する本津川下流域である。この本津側の両岸には後期後半以降の古墳が多数存在している（図4）。例えば、左岸の丘陵部には山野塚古墳や古宮古墳、鬼無大塚古墳を含む13基からなる神高古墳群が6世紀後半から7世紀前葉にかけて形成されている。また、香東川に挟まれた右岸の平野部には御厩大

塚古墳が築造されている。既に墳丘は失われているが円墳と想定され、残存長10mに及ぶ大型の横穴式石室を持ち、6世紀後半から7世紀初頭の築造と推定される。

この本津川下流域の状況は、坂田廃寺の様相と全く異にしており、同じ笠居郷に属する勝賀廃寺といえども、あえてこの地域から離れた場所に立地しており、特筆に値する⁹。

百相廃寺については、南西約2～3kmの位置に万塚古墳（墳丘消失、全長約7mの右片袖式横穴式石室、6世紀後半の築造か）、浅野八王子古墳（墳丘消失、玄室長約2.5mの右片袖式横穴式石室、6世紀後半の築造か）東赤坂古墳（円墳？全長約6m以上の横穴式石室、6世紀後半から7世紀の築造か）があるが、万塚古墳のみが百相郷に属し、あとの2基は大野郷に属している。百相廃寺がこれらの古墳から離れている理由としては、やはり南海道を志向したものと考えられよう。

阿野郡 この地域は古代豪族である綾氏の本拠地として知られている。そのためか、綾川下流域に比較的密接して3寺院が建立されている（図4）。

最も北側に位置するのが醍醐寺跡であり、山本郷に属する。短辺7m、長辺9mを測る土壇が存在し、計7個の礎石が残存している。採集瓦は少ないが、素縁複弁蓮華文軒丸瓦が確認されており、7世紀末頃のものと推定される。

その醍醐寺跡の南東約2km、綾川右岸に立地するのが鴨廃寺である。鴨部郷に属し、塔

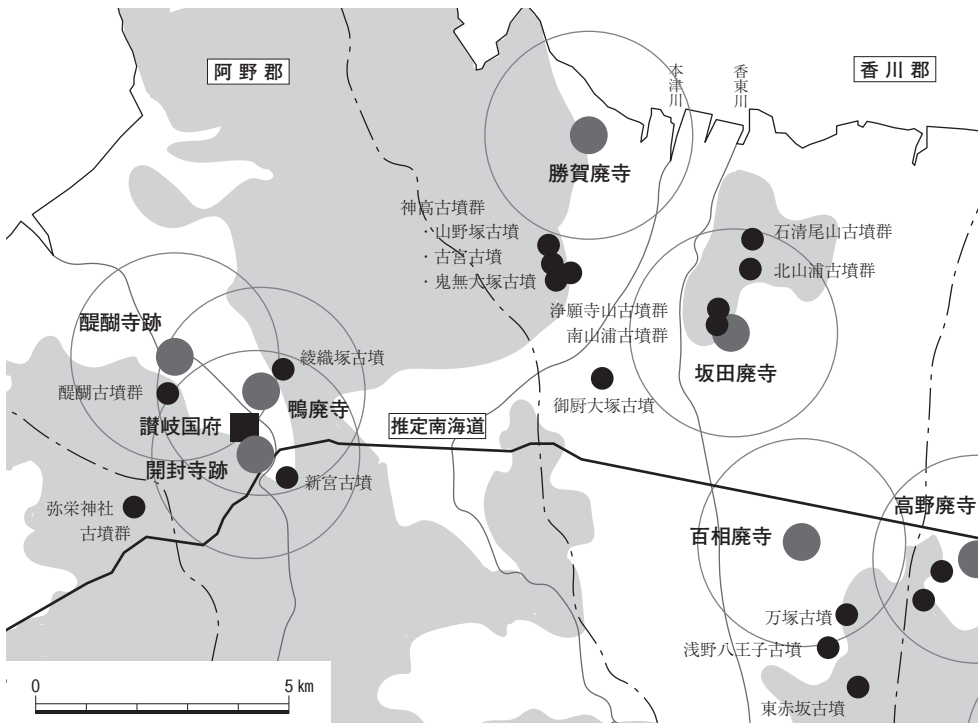


図4 香川郡・阿野郡の状況

心礎が残されている。採集されている瓦には川原寺式軒丸瓦と重弧文軒平瓦、藤原宮垂式軒平瓦などがあるが、そのうち3種類は後述の開封寺跡出土瓦と同範である。

その鴨廃寺から綾川を挟んで南約1.4kmの位置に存在するのが開封寺跡である。甲知郡に属し、北約150mの位置には讃岐国府が位置するほか、近隣には河内駅の存在が想定されることから、阿野郡のみならず、讃岐国の中枢域に立地していることがわかる。伽藍配置は不明ながら、凝灰岩切石の壇上積基壇を持ち、礎石や心礎などが残る塔跡が確認されている。出土瓦のうち、最古のものは素弁十弁蓮華文軒丸瓦で、これは7世紀中頃まで遡る可能性がある。このほか川原寺式軒丸瓦や藤原宮垂式軒平瓦があり、鴨廃寺出土瓦と同範のものが3種、法勲寺跡（鵜足郡）と同範のものが1種ある。

次に古墳の状況を見ると、3寺院のいずれにも隣接して古墳が築造されていることがわかる。最も顕著なのは醍醐寺跡の背後に展開する醍醐古墳群である。かつて16基が確認され、現在は9基が残存している。そのうち3号墳は約20m×約17mの方墳であり、県内有数の規模である全長約14mに達する両袖式横穴式石室を持つ。古墳群の形成は6世紀後半に始まり、7世紀前葉まで続くようである。同様に、鴨廃寺の背後にも綾織塚古墳が築造されている。一辺20mの方墳と推定され、全長14m以上の両袖式横穴式石室をもち、7世紀前葉の築造と推定される。そして開封寺跡の南東400m、綾川を挟んだ丘陵上には新宮古墳がある。一辺21mの方墳と推定され、全長約13mに達する両袖式横穴式石室をもち、6世紀末頃の築造と考えられている¹⁰。

このように、阿野郡の寺院は比較的狭い地域に密集しており、いずれも大型横穴式石室を有する古墳を背後に控えるなど、他の郡に比して特徴的な在り方を示している¹¹。

鵜足郡 鵜足郡に建立された古代寺院は法勲寺跡のみである（図5）。南海道の南側に立地し、坂本郷に属する¹²。伽藍の詳細は不明だが、寺域外の周溝の可能性のある遺構が確認されている。出土瓦としては八弁素弁蓮華文軒丸瓦や、開封寺跡（阿野郡）と同範の六弁単弁蓮華文軒丸瓦がある。このほか、川原寺式軒丸瓦や重弧文軒平瓦が確認されている。これらの年代から、7世紀末頃の創建と考えられる。

この法勲寺跡周辺には顕著な後期後半～終末期古墳は存在しない¹³。鵜足郡全体を見てみると、青ノ山古墳群（7基、6世紀後半～7世紀初頭）は法勲寺よりも遙か北に位置しており、弥栄神社古墳群（円墳7基、うち6基が横穴式石室。6世紀後半～7世紀初頭）や宇間神社古墳（直径16mの円墳、玄室長約5mの両袖式横穴式石室、6世紀後半～7世紀初頭）についても、法勲寺跡から遠く離れて立地している。

このように、鵜足郡では古墳から離れて、南海道を志向した場所に法勲寺跡のみが建立されている事実は興味深い。

那珂郡 那珂郡では北から順に田村廃寺、宝幢寺跡、弘安寺跡が建立されている（図5）。

田村廃寺は丸亀平野の北部、土器川と金倉川
の中間に位置し、杵原郷に属している。伽藍の
詳細は不明であるが、塔心礎が残されている。
出土瓦は川原寺式軒丸瓦や藤原宮亜式軒平瓦が
あり、そこから7世紀末頃の創建と考えられる。
なお、後者については仲村廃寺・善通寺跡（多
度郡）と同範である。

宝幢寺跡は南海道のすぐ北側に立地しており、
郡家郷に属する。付近に郡家の地名が残るとと
もに、那珂郡家と推定される郡家原遺跡が近隣
に所在することから、那珂郡家と関連する寺院

と想定される。塔心礎が残されており、発掘調査によって一辺100mの土壇が確認された。
出土瓦は藤原宮亜式軒丸瓦と重弧文軒平瓦が確認されており、後者については宗吉窯跡か
ら供給された可能性が指摘されている。7世紀末から8世紀初頭の創建と考えられる。

弘安寺跡は土器川中流域に位置し、子松郷に属する¹⁴。塔心礎と推定される石材のほか、
一辺約15m程度の土壇が残されている。出土瓦は細弁蓮華文軒丸瓦を中心とし、重弧文軒
平瓦も確認されていることから、7世紀末頃の創建と推定できる。

これらのうち、周辺に後期後半～終末期の古墳が確認されるのは弘安寺跡のみである。
安造田古墳群は弘安寺跡から北東約1.5km、土器川を挟んだ丘陵部に位置し、6基で構成
されている。そのうち安造田東3号墳は直径12mの円墳で、全長8mの両袖式横穴式石室
をもち、モザイクガラス玉が出土した。6世紀末～7世紀初頭の築造と考えられる。

多度郡 多度郡では仲村廃寺と善通寺跡が非常に近接して建立されている（図10）。とも
に南海道の北に即した立地であり、仲村郷に属する¹⁵。より北側に位置するのが仲村廃寺
であり、発掘調査で寺域北東隅に位置する土壇が確認されている。多数の瓦が出土してい
るが、特徴的なものとしては法隆寺式軒丸瓦・軒平瓦のほか、細弁蓮華文軒丸瓦や藤原宮
亜式軒平瓦がある。田村廃寺（那珂郡）と道音寺（三野郡）で同範瓦が確認されるほか、
同文の軒瓦が広く存在する。また近年、かつて表採されていた川原寺式軒丸瓦が、大和・
川原寺出土軒丸瓦と同範であることが判明している（清野ほか2020）。

この仲村廃寺の南西約500mの位置にあるのが善通寺跡である。現在の善通寺東院の位
置に相当し、金堂や講堂と推定される土壇が残されている。出土瓦については仲村廃寺と
ほぼ同範であることから、7世紀末に建立された仲村廃寺が8世紀前半頃に焼失したため、
善通寺跡に移建されたとの説がある。

これら隣接する2寺院の周辺には後期後半～終末期の古墳は存在しない。ただし南海道



図5 鵜足郡・那珂郡・多度郡の状況

の南側に目を向けると、2寺院より2km以上の距離を置いて、宮ヶ尾古墳と岡古墳群が築造されている。宮ヶ尾古墳は史跡有岡古墳群の中でも最後に築造される古墳で、直径22mの円墳である。全長9mの両袖式横穴式石室をもち、玄室及び羨道部壁面に線刻が描かれている。7世紀初頭の築造と推定される。岡古墳群はかつて16基確認されていたが、9基が現存する。直径15m程度の円墳からなり、全長8～9mの両袖式及び左片袖式の横穴式石室をもつ。こちらも5基の玄室及び羨道部壁面に線刻が確認されており、宮ヶ尾古墳との関連性が窺える。6世紀末～7世紀初頭に連続して築造されたものである。なお、両古墳は仲村郷の南に位置する生野郷に属している。

三野郡 この郡の2寺院はいずれも南海道沿いに立地する(図6)。道音寺跡は三野郡のほぼ中央に位置し、熊岡郷に属する¹⁶。伽藍の詳細は不明だが、塔心礎が残存している。出土瓦としては仲村廃寺・善通寺跡と同範の法隆寺式軒丸瓦のほか、川原寺式軒丸瓦が確認されており、7世紀末の創建と考えられよう。

道音寺跡の南西約2kmの位置には妙音寺跡がある。高野郷に属し、伽藍の詳細は不明だが、多数の瓦が出土している。特徴的なものとして、単弁十一弁蓮華文軒丸瓦や、山田寺式軒丸瓦¹⁷のほか、川原寺式軒丸瓦が確認されている。これらの年代から、7世紀末頃の創建と想定される。

この妙音寺跡の南東約1kmの地点には延命古墳がある。妙音寺跡と同じく高野郷に属し、直径15mの円墳で、全長約5mの右片袖式横穴式石室をもつ。6世紀末頃の築造と推定される。なお、道音寺跡周辺には後期後半～終末期の古墳は確認されていない。

最後に、古代寺院ではないが藤原宮所用瓦を焼成していた宗吉瓦窯についても触れておこう。妙音寺跡の北西約5kmの位置に所在し、詫間郷に属する。当初は3基の操業で、妙音寺跡へと瓦を供給していたが、その後21基の瓦窯が作られ、藤原宮所用瓦の生産が行わ

れた。一部には宝幢寺跡(那珂郡)にも瓦が供給されていたようである。なお、宗吉瓦窯周辺に顕著な古墳は確認できない。

刈田郡 郡内の古代寺院で、最も北側に位置するのが高屋廃寺である(図6)。高屋郷に属し、伽藍配置等の詳細は不明だが、周辺に「塔の内」の字名が残る。有稜素弁蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦が確認されており、7世紀末の創建と推定される。

大興寺跡は南海道南側の丘陵斜面上に位置する。山本郷に属し、現在の大興寺の北方に焼失した寺院があるとの伝があり、そこより瓦が採集されている。十三

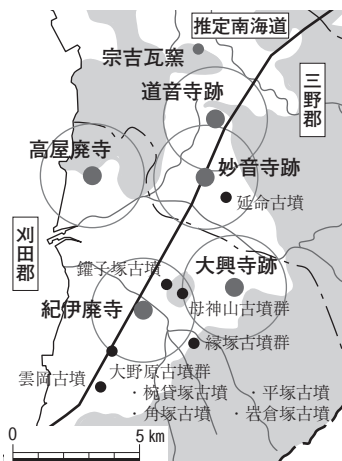


図6 三野郡・刈田郡の状況

弁素弁蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦のほか、鴟尾が確認されており、7世紀末の創建と考えられる。

郡内で唯一、南海道に沿って立地するのが紀伊廃寺である。紀伊郷に属し¹⁸、伽藍等の詳細は不明である。奈良時代から平安時代に属する瓦が多いが、八弁単弁蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦が確認されており、こちらも7世紀末の創建である可能性が高い。

古墳の様相を見てみると、紀伊廃寺の北東約1.5kmの位置に母神山古墳群が展開している。母神山全域の1km四方に57基の円墳が確認されており¹⁹、6世紀中葉から築造が開始され、概ね6世紀末に築造が停止し、その後は一部で追葬が確認される。群内には直径48mの大型円墳で、全長約10mの両袖式横穴式石室をもつ鐘子塚古墳が含まれており、母神山古墳群の盟主の墳墓といえよう。そして母神山古墳群の南方約2kmの位置には、12基の円墳からなる縁塚古墳群がある。母神山古墳群と同様、6世紀中葉から築造が開始されるが、7世紀初頭にも一部築造がなされているようである。なお、母神山古墳群は山本郷に、縁塚古墳群は紀伊郷に属している。

そして紀伊廃寺の南西約2km、南海道沿いに位置しているのが大野原古墳群である。この古墳群は讃岐のみならず、四国においても最大規模の大型横穴式石室をもつことから、その年代的位置づけや系譜関係、歴史的意義に関して、既に数多くの研究がなされている（山崎1985、大久保2004・2009、清家2011、観音寺市教委2014など）。それらの研究に関する詳述は割愛するが、古墳群の概略について整理すると、6世紀後半に先述の鐘子塚古墳に続いて椀貸塚古墳（直径37mの円墳、全長約15mの両袖式横穴式石室）と岩倉塚古墳（直径約37mの円墳、2基の横穴式石室をもつ）が築造され、7世紀に入ると平塚古墳（直径50mの円墳、全長約13mの両袖式横穴式石室）が、続いて角塚古墳（一辺約40mの方墳、全長約12.5mの両袖式横穴式石室）と連続的に築造されている。

その後、さらに南へと場所を違えて築造されるのが雲岡古墳である。一辺約12mの方墳で、玄室長約1.5mと小型の無袖式横穴式石室をもつ。築造は7世紀末とされており、郡内でも最終段階の古墳と位置づけられる。

なお、大野原古墳群と雲岡古墳は姫江郷に属しているが、この姫江郷内に古代寺院が確認されていないことは、讃岐における古墳から寺院への変遷過程を考える上で重要な示唆を含んでいると考える。そこで次章では、本章で詳述した古墳から寺院への変遷過程を経括するとともに、その社会的背景について検討を行う。

IV 古墳から寺院への変遷過程

讃岐地域の古代寺院について、その立地状況と古墳との関係を整理すると、4つの類型

表1 各寺院の類型について

郡名	郷名	寺院名	平地	丘陵 端部	古墳	南海道	類型
大内郡	白鳥郷	白鳥廃寺	○		○	○	I A
寒川郡	難波郷	下り松廃寺	○		○	○	I A
	石田郷	極楽寺跡		○	●	○	I A
山田郡	坂本郷 三谷郷	高野廃寺	○		○	○	I A
香川郡	百相郷	百相廃寺	○		○	○	I A
阿野郡	甲知郷	開封寺跡		○	●	○	I A
三野郡	高野郷	妙音寺跡	○		○	○	I A
刈田郡	姫江郷	紀伊廃寺	○		●	○	I A
寒川郡	神埼郷	石井廃寺		○	○		I B
三木郡	高岡郷	上高岡廃寺		○	○		I B
	井上郷	始覚寺跡		○	○		I B
山田郡	宮処郷	宝寿寺跡		○	○		I B
	高松郷	山下廃寺		○	●		I B
香川郡	坂田郷	坂田廃寺		○	●		I B
阿野郡	鴨部郷	鴨廃寺		○	●		I B
	山本郷	醍醐寺跡		○	●		I B
那珂郡	子松郷	弘安寺跡		○	○		I B
鵜足郡	井上郷	法勲寺跡	○			○	II A
那珂郡	郡家郷	宝幢寺跡	○			○	II A
多度郡	仲村郷	仲村廃寺		○		○	II A
	仲村郷	善通寺跡		○		○	II A
三野郡	熊岡郷	道音寺跡		○		○	II A
寒川郡	造田郷	願興寺跡		○			II B
三木郡	氷上郷	長楽寺跡		○			II B
山田郡	殖田郷	下司廃寺	○				II B
香川郡	笠居郷	勝賀廃寺		○			II B
那珂郡	杵原郷	田村廃寺	○				II B
刈田郡	高屋郷	高屋廃寺		○			II B
	山本郷	大興寺跡		○			II B

太字の寺院：郡寺の可能性が高いもの

●：全長10m以上の横穴式石室墳か、有力な群集墳をとまうもの

存在しない地域に新たに建立されている事実である。すなわち、古墳及び古墳群を築造するような政治的勢力が顕在化していない地域に、寺院が造営されているのである。したがって、山中敏史の用語に倣うとすれば、これらⅡ類は「非本拠地型」の寺院であり、Ⅰ類は「本拠地型」と呼ぶことができよう（山中1983：p.322）。

そして見過ごしてはならないのは、この表には含まれない「Ⅲ類」の存在である。すなわち、大野原古墳群（刈田郡）や神高古墳群（香川郡）のように、有力な古墳が築造されながら寺院が造営されない地域の存在である。特に大野原古墳群は、四国全域に影響を及ぼすような首長墳であったにもかかわらず、後続して寺院が造営されることはなく、後の奈良時代においても讃岐国で唯一、文献史料に「刈田郡」の記載が登場しないなど、当該地域の政治的・社会的地位の凋落ぶりは明らかである。

この状況について大久保徹也は、7世紀後半にそれまでの地域的政治秩序を否定する方向で律令的地域編成が推し進められ、「諸勢力の分断・破片化を意図した」施策がなされ

に分類することができる。すなわち、半径4里内に古墳が立地するものをⅠ類、しないものをⅡ類として大別し、さらに南海道に近接するⅠ類と接さないⅡ類とを組み合わせ、古墳＋南海道に近接するⅠⅠ類、古墳のみ近接するⅠⅡ類、南海道のみ近接するⅡⅠ類、古墳＋南海道ともに接していないⅡⅡ類となる。これに、寺院の立地を加えて表示したものが表1である。以下では、この表に基づいて論じることとする。

古墳との関係 表1に掲げた29寺院のうち、古墳に近接するⅠ類が17寺院、接さないⅡ類が12寺院となる。これを立地から見ると、古墳の築造に際しては丘陵部が好まれることもあり、Ⅰ類の多くが丘陵端部に立地している。地理的には、鵜足郡より西方の地域にⅡ類が多いのも特徴である。

ここで指摘したいのは、讃岐地域における4割の寺院（＝Ⅱ類）が、古墳が存

たと指摘する（大久保2004：p.103）。非本拠地型であるⅡ類の寺院が4割存在するという事実は、その指摘の一端を示しているといえよう。

しかしながら、全長10m以上の横穴式石室墳や有力な群集墳をともなうⅠ類が6割に達するのも事実である。顕著な事例としては山下廃寺（山下古墳など）、坂田廃寺（浄願寺山古墳群など）、開封寺跡（新宮古墳）、鴨廃寺（綾織塚古墳）、醍醐寺（醍醐古墳群）、紀伊廃寺（母神山古墳群など）などがあげられる。

このうち阿野郡の3寺院については、南海道だけでなく讃岐国府にも近接して存在しており、極めて特殊な在り方を示している。これは、当該地域で権勢を誇っていた有力氏族である綾氏の存在を示すものと考えられ、古墳時代以降においても、その勢力圏が強固に保たれていたことがわかる。

これらを考慮に入れると、7世紀後半に生じた律令的地域編成は、それを主導した中央政権の意向を明確に反映するものであり、本拠地型のⅠ類に見られる地域的政治秩序を温存するような編成とともに、地域勢力を分断・破片化する編成（＝Ⅲ類）、そして古墳の空白域、いわゆる非本拠地に寺院造営を可能にせしめる編成（＝Ⅱ類）とが、各地域の状況に応じて選択的に実施された結果と考えられよう。

南海道との関係 次に南海道の状況であるが、ここで重要なのは寺院の立地状況である。表1から見ても明らかなように、南海道に近接する寺院（＝A類）は基本的に平野部に立地しており、丘陵部に立地する事例はごくわずかである。

ここで郡内に1寺院しかない事例（白鳥廃寺、法興寺跡）と、「郡家郷」に位置する事例（宝幢寺跡）に注目すると、いずれも「平野－南海道」という関係にあることがわかる。郡内唯一の寺院や郡家に隣接する寺院は「郡寺」の可能性が高いことから、平野に立地するA型は「郡寺」に特有の在り方と推定される。さらに丘陵端部に立地していても、郡内で唯一南海道に接している寺院（開封寺跡、仲村廃寺・善通寺跡）や、開封寺跡の状況に類似した有力古墳が近接するもの（極楽寺跡、妙音寺跡、紀伊廃寺）についても、同様の指摘が可能である。おそらくは郡寺の公的性格から鑑みて、郡衙²⁰とともに南海道に接して立地することが重要視されていたものと考えられる。

南海道に接することなく造営された寺院について見てみると、古墳時代以来の勢力圏内に造営される寺院（＝ⅠB類）は、「郡寺」に対して「氏寺」としての位置づけが可能であろう。一方、古墳を伴わない寺院（＝ⅡB類）については、多くが丘陵端部に造営されており、立地だけ見ると古墳や群集墳の立地と大差ない。そこから考えると、古墳時代には古墳を造営することのなかった集団、いわば新興勢力の氏寺と想定される。

4類型の歴史的背景 上記に基づいて、古墳と寺院の関係に見る4類型の歴史的背景に関する分析を行うが、議論の前提として、今回取り上げた古墳の築造時期と寺院の造営時

期が概ね重複しないことを指摘しておきたい。古墳及び群集墳の多くは7世紀前半までのものであり、7世紀末の築造とされる塚谷古墳（三木郡）と雲岡古墳（刈田郡）は、あくまで例外的な存在である。寺院についても、開封寺跡（阿野郡）のみ7世紀中頃まで遡る可能性があるが、他はすべて7世紀末頃以降の建立と考えられる。したがって、7世紀中頃を境に古墳から寺院への変遷が生じていることがわかる。そしてその時期は、後期立評に基づく律令的地域編成の施行時期に他ならない。すなわち、讃岐における古墳から寺院への変遷は、従来の地域的政治秩序から律令的地域編成への移行を示すものなのである。

その前提を踏まえた上でⅠA類を見てみると、古墳と南海道の両者に接していることから、古墳時代以来の勢力圏がそのまま律令的地域編成においても維持された結果と考えられる。この場合の勢力圏は「里」あるいは「郷」単位によるものであり²¹、下り松廃寺以外の7寺院はいずれも郡寺の可能性が高いことから、南海道に接して各郡の政治的・社会的の中核としての役割を担っていた勢力圏内に郡寺や郡衙が設けられたと推定される。その代表格が、綾氏の本拠地にして讃岐国の中核となった阿野郡甲知郷であろう²²。

ⅠB類は古墳が築造された丘陵端部に接して寺院が造営されていることから、こちらも古墳時代以来の勢力圏が維持されている可能性が高い。ただし南海道から外れていることから、律令的地域編成の過程の中で政治的・社会的の中核域にはなれなかったものの、有力氏族の奥津城と呼べる地域に氏寺として造営されたものと想定される。特に山下廃寺や坂田廃寺はその傾向が顕著であり、鴨廃寺や醍醐廃寺は綾氏の傍系によるものと考えられる。

一方ⅡA類は、従来の地域的政治秩序では古墳の空白域だったが、律令的地域編成を経て新たに政治的・社会的の中核としての役割を担うようになった勢力圏において、寺院が造営されたケースといえよう。換言すれば、7世紀後半以降に興隆した新興勢力によって造営された寺院と位置づけられる。しかも道音寺跡を除いた4寺院は、いずれも丸亀平野における各郡の郡寺である可能性が高いことから、新たに郡司層として位置づけられた佐伯氏などの有力氏族の活躍を示すものであろう。これに対してⅡB類は、いずれも南海道からは外れた勢力圏に寺院が造営されていることから、新興勢力の氏寺としての性格を有していたものと考えられる。

そして大野原古墳群や神高古墳群のようなⅢ類は、前述の大久保の指摘通り（大久保2004）、律令的地域編成の変遷に伴って従来の地域的勢力圏が分断・破片化された様相を示すものであり、結果として寺院を造営するには至らなかったであろう。

瓦から見た地域関係 最後に、律令的地域編成における地域関係について、出土瓦の様相から簡単に整理しておく。まず、軒瓦の同范関係について適宜紹介してきたが、その分有関係の範囲を見ると、概ね東讃地域（香川郡以東）と中・西讃地域（阿野郡以西）の範囲内に収まり、その境界をこえる分有関係はわずか1例のみである（極楽寺跡－上高岡廃寺

－弘安寺跡)。また、藤原宮式軒瓦は東讃地域にのみ分布しており²³、中・西讃地域には藤原宮式軒瓦しか存在しない。先に、古墳を伴わないⅡ類の寺院が鶴足郡以西に多いと指摘したが、これも東讃－中・西讃という大きな地域区分を示している可能性がある。

そして讃岐における瓦生産の開始は外部からの技術導入を契機にするものであろうが、その最も初現型式である瓦が阿野郡の開封寺跡から出土している点は興味深い。また、讃岐地域で最も普遍的に見られるのが川原寺式軒丸瓦であるが、仲村廃寺（多度郡）からは大和の川原寺式軒丸瓦と同範瓦が出土する（清野ほか2020）とともに、宝幢寺跡（那珂郡）と宗吉瓦窯（三野郡）からは川原寺に系譜を引く凸面布目平瓦が出土している。このように、讃岐地域の瓦生産の導入は中・西讃地域において主導的に開始され、その背景には綾氏や佐伯氏といった有力氏族の活躍が窺えよう。

一方、かつて大野原古墳群が築造された刈田郡を見ると、紀伊廃寺・高屋廃寺・大興寺跡では独特の文様をもつ単弁蓮華文軒丸瓦が主流となり、川原寺式軒丸瓦や藤原宮式軒瓦は見られない。また、この単弁蓮華文軒丸瓦も他郡での出土例がないため、刈田郡の瓦生産が極めて独立して行われていることがわかる。これも、律令的地域編成後の刈田郡の政治的・社会的位置づけを示す好例といえよう。

V おわりに

以上、讃岐地域における古墳から寺院の変遷について論じ、その歴史的背景として古墳時代の地域的政治秩序から律令的地域編成の変遷が大きく影響していることを示した。とはいえ、雑駁な論理展開となってしまう、文献史の研究成果についても十分に盛り込むことができなかった。ただし、これらの課題については一地域に留まらず、さらに全国各地の状況を踏まえて議論することが重要と考えるため、さらなるケーススタディを重ねつつ、分析・検討を深めていくこととしたい。

なお紙幅の関係上、各寺院や古墳の発掘調査報告書等については、引用の明示を割愛せざるを得なかった。各報告書の作成者に敬意を表するとともに、深くお詫び申し上げたい。

註

- 1 この「約2 km以内の範囲」に初めて言及したのは山中敏史である（山中1983：p.328）。この数字の根拠については言及されていないが、郡衙の周辺約2 kmの範囲について、経験則的に「郡衙を含む最小の領域＝里（郷）」として把握していたのかもしれない。
- 2 7世紀の段階では「郷」よりも「里」が正しい表現であろうが、平城宮出土木簡に「山田郡海郷」や「香川郡原里」という『倭名類聚抄』には記載のない里・郷名も確認されており、当時の領域復元は容易ではない。したがって本稿では、作業概念としての領域区分を『倭名類聚抄』の「郷」に拠ることとし、表記についても「郷」を使用する。

- 3 讃岐地域の古瓦は大和地域からの影響を受けて成立しているため、文様もやや変容しているが、本稿では広義にとらえ、山田寺式・法隆寺式・川原寺式・藤原宮式と呼称する。
- 4 下り松廃寺の属する難波郡には南海道の松本駅が位置していたと推定されており、その推定地である千町遺跡が下り松廃寺の南東750mの位置に存在するなど、高い関連性が窺える。
- 5 ただし、緩斜面の立地であることから瓦窯の可能性も指摘されている（川畑1996）。
- 6 下り松廃寺の箇所でも述べたが、この素弁六弁及び七弁蓮華文軒丸瓦には歯車状加工が見られることから、岡本治代は7世紀末～8世紀と所産と推定する（岡本2020）。
- 7 高野廃寺は高松市川島本町に位置し、西側の三谷町に隣接していることから川畑聰は三谷郷に属すると推定する（川畑1996）。ただし、東に隣接する川島東町については、江戸期の坂本村に相当することから坂本郷と考えられ（国島1988）、川島本町についてもその一部である可能性があり、現状ではどちらも決めがたい。
- 8 下司廃寺の南西には尾越古墳や大亀古墳群が位置しているが、出土している埴輪などから6世紀中葉ごろの築造と考えられている。
- 9 御厩大塚古墳は笠居郷の東に隣接する中間郷に属するため、勝賀廃寺とも坂田廃寺とも領域を異にしている。
- 10 近年の研究では、横穴式石室の型式学的組列から、新宮古墳→綾織塚古墳→醍醐3号墳という変遷が辿れるようである（信里2014）。
- 11 なお、阿野郡の南方には多数の横穴式石室が展開する羽床地域があるが（信里・乗松2004）、この羽床郷には古代寺院が確認されていない。その点で、先の山本・鴨部・甲知郷の在り方とは大きく異なることがわかる。
- 12 藤井直正は坂本郷に属すると推定し（藤井1983）、国島浩正は井上郷に属するとする（国島1988）。法勲寺跡がある飯山町法軍寺地区をどちらの郷に属すると考えるのかによって異なるわけであるが、法勲寺に瓦を供給していた瓦山瓦窯が坂本郷に位置していることから、法勲寺跡も坂本郷と考える方が妥当であろう。
- 13 この法勲寺跡の西南100mの位置には直径30～40mの円墳と推定される讃留霊王古墳が存在しており、発掘調査がなされていないため詳細不明ではあるが、墳丘規模から見て6世紀後半以降に降る可能性は少ないと思われる。
- 14 藤井直正は良野郷に属するとするが（藤井1983）、良野郷はこれよりも南の満濃池周辺と考えられることから、本稿では子松郷と判断した（国島1988）。
- 15 南海道の甕井駅家が両寺院の周辺に存在していたと想定されるが、現状では弘田郷ないし三井郷に位置するとの説がある。
- 16 藤井直正は、道音寺跡を妙音寺跡と同じく高野郷に属すると想定するが（藤井1983）、両寺院は概ね4里離れているため、同じ郷と想定するよりは隣接する郷にそれぞれ建立されている、と考えた方が自然である。
- 17 妙音寺跡出土の山田寺式軒丸瓦は宗吉瓦窯からも出土しており、その丸瓦先端の加工法を分析した渡部明夫は、これらが藤原宮式軒丸瓦より後出すると結論づける（渡部2009）。
- 18 国島浩正は姫江郷に属するとあるが（国島1988）、現在の木之郷町に隣接していることから、紀伊郷とするのが正しいと思われる。
- 19 今回は墳長21mの前方後円墳である瓢塚古墳を母神山古墳群に含めずに解説する。
- 20 これを郡衙遺跡との関連で見ると、白鳥廃寺には住道遺跡（大内郡衙）が、法勲寺跡には岸の上遺跡（鵜足郡衙）、宝幢寺跡には郡家原遺跡（那珂郡衙）、仲村廃寺・善通寺跡には生

野本町遺跡（多度郡衙）が対応しており、郡衙－郡寺という関係が成り立つ。

- 21 文献史では「里」は領域概念にすぎず、領域区分ではないとするのが通説であるが（荒井2009など）、播磨国風土記の記述と考古学的分析から、7世紀後半の「里」を領域区分とする説もある（岸本2013）。本稿で示したように、寺院が半径4里を中心とする範囲ごとに立地することから、領域区分が成立していたとする説に賛同したい。
- 22 奈良時代になると阿野郡新居郷に讃岐国分寺・国分尼寺が建立されるが、これも讃岐国府と同様に、綾氏の本拠地に造営される必要があったのであろう。
- 23 この背景として、讃岐東部でも宗吉瓦窯のような藤原宮所用瓦の生産が行われた可能性が指摘されている。特に、藤原宮式軒平瓦6647Eと願興寺跡（三木郡）出土の偏行変形忍冬唐草文軒平瓦が同范であることから、その近辺での生産が想定されている（山崎1995）。

参考文献

- 荒井秀規 2009「領域区画としての国・評（郡）・里（郷）の成立」『古代地方行政単位の成立と在地社会』奈良文化財研究所 pp.171-212
- 大久保徹也 1995「讃岐」『全国古墳編年集成』石野博信編 雄山閣出版 pp.60-63
- 大久保徹也 2004「讃岐の古墳時代政治秩序への試論」『古墳時代の政治構造 前方後円墳からのアプローチ』青木書店 pp.80-105
- 大久保徹也 2009「大野原古墳群の基礎的検討」『一山典還暦記念論集 考古学と地域文化』一山典還暦記念論集刊行会 pp.501-510
- 岡本治代 2020「讃岐における古代瓦の文様系譜」『さぬき野に種をまく』『片桐さん』退職記念論集刊行会 pp.117-136
- 香川県教育委員会 1983『新編香川叢書 考古篇』第一法規出版
- 梶原義実 2016「讃岐地域における寺院選地」『名古屋大学文学部研究論集』185 pp.83-100（2017『古代地方寺院の造営と景観』吉川弘文館に所収）
- 亀田修一 1995「瀬戸内沿岸地域の古代寺院と瓦」『瀬戸内海地域における交流の展開』古代王権と交流6 松原弘宣（編） pp.269-318
- 川畑聰 1996『讃岐の古瓦展』高松市歴史資料館
- 川畑聰 2003「讃岐国における古代寺院出土軒瓦の同范・同文関係」『考古学に学ぶ（Ⅱ）』同志社大学考古学シリーズⅧ pp.481-496
- 観音寺市教育委員会 2014『大野原古墳群Ⅰ』観音寺市内遺跡発掘調査事業報告書15
- 岸本道昭 2013「7世紀の地域社会と領域支配 播磨国揖保郡の古墳と寺院、郡里の成立」『国立歴史民俗博物館研究報告』第179集 pp.73-112
- 国島浩正 1988「律令体制と讃岐」『香川県史』第一巻通史編 原始・古代 香川県（編） pp.583-644
- 小林三郎・佐々木憲一（編） 2013『古墳から寺院へ―関東の7世紀を考える―』考古学リーダー22 六一書房
- 佐藤竜馬 1997「讃岐地方における古墳の終末と火葬墓の出現」『古墳時代から古代における地域社会』第41回埋蔵文化財研究集会発表要旨資料 pp.524-539
- 下原幸裕 2006『西日本の終末期古墳』中国書店
- 白石太一郎 2006「古墳の終末と古代寺院の造営」『終末期古墳と初期寺院の造営を考える』藤井寺市教育委員会 pp.23-48（2007『近畿の古墳と古代史』学生社 pp.111-128に所収）
- 信里芳紀 2014「綾北平野の大型横穴式石室墳の築造年代とその評価」『讃岐国府跡探索事業調査

- 報告 平成25年度 新宮古墳・醍醐3号墳の確認調査』香川県埋蔵文化財センター pp.41-46
- 信里芳紀・乗松真也 2004「讃岐地域における後期古墳の階層構造 ～墳丘規模・内部主体・副葬品の検討を中心に～」『中・後期古墳の階層秩序』第9回中国四国前方後円墳研究会徳島大会発表要旨集 pp.132-147
- 鈴木一有 2013「7世紀における地域拠点の形成過程 東海地方を中心として」『国立歴史民俗博物館研究報告』第179集 pp.137-166
- 清家章 2011「首長系譜変動の諸画期と南四国の古墳」『古墳時代政権交代論の考古学的再検討』福永伸哉（編）大阪大学文学部考古学研究室 pp.29-42
- 清野孝之・川畑聰・渡辺明夫・石田由紀子・道上祥武 2020「讃岐仲村廃寺の川原寺式軒丸瓦と川原寺601C」『奈良文化財研究所紀要2021』 pp.14-15
- 蓮本和博 1999「軒平瓦に見る讃岐の白鳳寺院」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』Ⅶ pp.33-68
- 蓮本和博 2001「白鳳時代における讃岐の造瓦工人の動向―讃岐、但馬、土佐を結んで―」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』Ⅸ pp.29-57
- 林正憲 2010「「古墳」から「寺院」へ―小地域におけるケーススタディー―」『待兼山考古学論叢』Ⅱ 大阪大学文学部考古学研究室 pp.641-667
- 林正憲 2021「美濃地域における古墳から寺院への変遷過程」『昼飯の丘に集う―中井正幸さん還暦紀年論集』真陽社 pp.133-142
- 広瀬和雄 2013「終末期古墳の歴史的意義 7世紀の中央政権の歴史的意義」『国立歴史民俗博物館研究報告』第179集 pp.11-72
- 藤井直正 1983「讃岐国古代寺院跡の研究」『藤澤一夫先生古希記念古文化論叢』古代を考える会（編） pp.471-507
- 三舟隆之 2003『日本古代地方寺院の成立』吉川弘文館
- 森郁夫 2010「古代讃岐における瓦生産と寺院造営」『香川考古』第12号 pp.23-32
- 山崎信二 1987「後期古墳と飛鳥白鳳寺院」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論集 同朋舎 pp.179-216
- 山崎信二 1985『横穴式石室構造の地域別比較研究―中・四国編―』1984年度文部科学研究費奨励研究A 共同精版印刷（2003『古代瓦と横穴式石室の研究』同成社 pp.247-396に所収）
- 山崎信二 1995「藤原宮造瓦と藤原宮の時期の各地の造瓦」『文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所創立40周年記念論集 同朋舎 pp.249-271
- 山田誠司 2008「製作技法から見た讃岐の古代瓦」『地域・文化の考古学―下条信行先生退任記念論文集』愛媛大学法文学部考古学研究室（編） pp.561-578
- 山中敏史 1983「評・郡衙の成立とその意義」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論集 同朋舎 pp.321-346
- 渡部明夫 1990「四国」『古墳時代の研究10 地域の古墳Ⅰ 西日本』石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎（編）雄山閣 pp.99-120
- 渡部明夫 2009「調査の成果とまとめ」『宗吉瓦窯跡調査・保存整備報告』三豊市教育委員会 pp.69-88

挿図出典

いずれも筆者作成